

年/歳	株式会社フェリシモ&たねっと時代	
82/16	中学時代から写真を撮るようになり、高校は写真部へ、「日本カメラ」フォトコンテスト応募	
89/24	大学卒業、フェリシモ入社(大阪) 同期入社の面々・先輩から刺激を受ける、企画力アップ研修、自分探しスタート、アイデア・発想・企画に関する本も読むようになる	
90/25	環境問題との出会い、人生初のコンセプトの創造(「就職と地球」) 人材教育、結婚、	
91/26	人事	
92/27	ソーシャルデザインルーム所属、地球サミット関連事業、「後世への最大遺物」と出会う(33歳で人生リセット決意) モモの家(いのちと食情報センター)と出会う	
93/28	将来世代総合研究所所属(企業内研究所) 将来世代フォーラム企画運営、	
94/29	作家・翻訳家の星川淳さんの住む屋久島へ(半農半著との出会いは前年?) 将来世代フォーラム企画運営、	
95/30	半農半Xコンセプト誕生年(エッセイ) 阪神大震災、地下鉄サリン	
96/31	綾部から京都市のオフィスに通う(半年) 自給農・雑穀食スタート、妊娠、京都市へ移転	
97/32	雛子誕生	
98/33	たねっと(在来種を守る活動)スタート・メディア登場、半農半Xということば、マスコミ初登場=「田舎暮らしの本」(宝島社)「湧」(地湧社) 市民農園(京都・一乗寺)	
99/34	フェリシモ卒業(約10年勤務)・綾部へUターン(1月) 母校閉校(3月) 綾部市制施行50周年に向けての「市民企画」応募、綾部人と多く出会う、市内初講演(たねっと)	
	半農半X研究所	里山ねっと・あやべ
2000 35歳	講演(たねっと) 半農半X研究所設立(4月) ホームページ開設、『ボランティアコミュニティ』(農文協)	里山ねっと・あやべ(5月設立準備、7月発足) 田舎暮らし情報センター、農家民泊型の田舎暮らしイベント開催
2001 36歳		「つばさかはえるちず」制作、ホームページ開設、「ウィークリーメッセージ」スタート、あやべ田舎暮らし初級ツアー開催、地元通信スタート
2002 37歳	『青年帰農』(農文協) 3時起き開始、一筆啓上賞受賞	「里山的生活メールニュース」スタート
2003 38歳	日経新聞、中日新聞、『半農半Xという生き方』(ソニー・マガジズ) 半農半Xブログ開設、半農半X研究所ニュース発行	
2004 39歳	NHK「ご近所の底力」 「田舎暮らしの本」掲載、農のあるライフスタイル会議委員(京都府)	
2005 40歳	半農半Xメルマガ発行、「研究所 研究所」ブログ開設、村のひかりカフェスタート	フォトログ「BLISSFUL CITY」開設(スタッフブログ)
2006 41歳	『半農半Xという生き方 実践編』(ソニー・マガジズ) 『半農半X的生活』(中国語版) inspire 365スタート、「1000本プロジェクト」スタート、東京で初講演(カフェスロー) 「屋号力研究所」「21世紀の肩書研究所」ブログ開設、	
2007 42歳	『綾部発 半農半Xな人生の歩き方 88』(遊タイム出版) 『半農半Xの種を播く』(コモンズ) メモ銀行スタート、「半農半Xデザインスクール」スタート、朝日新聞「ニッポン人脈記」紹介、「A to Z研究所」「視点集」ブログ開設	綾部里山交流大学開校(交流デザイン学科/年3回×2泊3日)
2008 43歳	『半農半Xという生き方』新書化(ソニー・マガジズ) 「半農半Xカレッジ東京」スタート、「半農半Xデザインブック」発刊、宇根豊さん他と対談、『京の田舎ぐらし』(京都新聞出版) 『自給再考』(農文協) 「at」(太田出版) 「提唱研究所」ブログ開設、Uターン10年目	綾部里山交流大学(交流デザイン学科・年3回×2泊3日) マスターコース開設(地域資源学、農的感性学、情報発信学/年3回×1泊2日)

里山ねっと・あやべからの情報発信について コンセプト「半農半X」からの情報発信について

半農半X研究所代表、里山ねっと・あやべ情報発信担当 塩見 直紀

2008年12月6日～7日

綾部里山交流大学マスターコース「情報発信学講座」

(1) 里山ねっと・あやべと情報発信

- NPO法人「里山ねっと・あやべ」発足の経緯・背景等
- ・旧豊里西小学校の閉校(1999年3月) 跡地の活用
- ・綾部東部地域への投資のみへの批判 西部地域への投資
- ・ハード事業からソフト事業へ転換
 - 里山ねっと・あやべ発足の2000年は綾部市制施行50周年
 - 同時に計3つ新設される(ボランティア総合センター、環境市民会議)
- ・公設民営(市長の発案、発足、NPO法人化へ)
 - 補助金・事業委託 商工観光課や農林課の仕事を吸収している面も 行政スリム化
- ・里山ブーム 綾部に残された資源、未活用なものとしての自然
- ・グリーンツーリズム(都市農村交流)の時代 内発的発展の限界? 交流デザインの大事さ(組み合わせ力)

里山ねっと・あやべでの仕事

1965年、綾部市生まれ。1999年1月、故郷に33歳でUターン。3月、母校閉校。
同年、綾部市が市民企画を公募(翌年が市制施行50周年)、4案応募。
2000年5月より、都市と農村の交流、定住支援などをおこなう里山ねっと・あやべスタッフ。
過去、農家民泊、田舎暮らしツアー、綾部里山交流大学、地元通信などを企画。
地元学の講座やフィールドワークを経験。現在は情報発信、綾部里山交流大学などを担当。

里山ねっと・あやべのコンセプトについて 「里山力×ソフト力×人財力」

- ・里山力(里山の風景、癒しの力など=舞台)
- ・ソフト力(多様な里山文化、着想、アイデアなど=ソフトパワー)
- ・人財力(夢や想い、志、キャラクターなど=最後は人 センス・オブ・ワンダー)

2001年3月からホームページで発信。綾部からの全国発信に力を入れる。

継続力、型の力

メッセージの質も大事だが、初期においては量(文字数)の累積も大事。

旧ホームページコンセプト(4つの掛け算)

- ・デザイン(田谷美代子さん)×イラスト(相根良孝さん)×メッセージ(塩見)×哲学
- 当時、「田舎には素晴らしいホームページでびっくりした」の声も

同年4月から「ウィークリーメッセージ」スタート。6年半、ほぼ毎週発信して、現在350号。

- ・月1の発信では少ない、毎日ではできない、週1にチャレンジ
- ・一時、システム移行で休みの期間あり

2002年4月から、「里山的生活メールニュース」スタート。

- ・冬至、春分など「二十四節気」の日に発信(月2回、年24回)、6年半継続、明日の大雪で160号配信。
- ・二十四節気など旧暦ブーム前?。松村賢治さんの『旧暦と暮らす スローライフの知恵ごよみ』(ビジネス社)は2002年11月刊。小林弦彦さんの『旧暦はくらしの羅針盤』(NHK生活人新書)は同年12月刊。
- ・毎週の発信は不安、月1では少ない。月2回をめざす。二十四節気にあわせる。
- ・大事なことだったと気づかされたこと=月々の情報をコンパクトにまとめ、提供すること。散らばりがちな情報を1つにまとめることの大事さ。人生とは日々、「まとめ&まとめ」である。

あやべ田舎暮らし情報センター（木造の旧保健室）

- ・間伐材×黒谷和紙×ハタノワタルさん×本　　キャッチフレーズ「21世紀の保健室」
- ・NHK TVで放映され、電話が鳴り続ける。
- ・看板をあげると人がくる。看板をあげることの大事さ。名前（屋号）の大事さ。
- ・これは名刺の肩書も同じ。掲げることの大事さ。例　通訳・翻訳家

つばさをはえる地図（地域マップ）

- ・「地元学×自己探求」の観点からの地域マップ（旧豊里西小学校区　5自治会、約250戸）
- ・イラストレーターの田谷美代子さん作　1ヵ月半で取材からイラスト、デザイン、印刷まですべて終了
- ・日本のどんな小さな集落も可能
- ・どんなに山奥の村でも書き手と写真の撮り手がいれば、全国発信可能（キーは感受性）

旅人がエッセイを書いてくれるまち（農家民泊）　　ゴミを残されるだけのまちを超えて

- ・農家民泊「素のまんま」芝原キヌ枝ブランド
- ・ホームページで農家民泊体験者のエッセイを公開、見た人が訪問
- ・エッセイも地域資源であるという視点。旅人の撮る写真も地域資源、ブログも地域資源。

新しい機軸としての「物語数」　「物語数」で競う世界の創造

- ・入込客、売上高の時代から新しい価値観、新しい座標軸の時代へ
- ・1万の物語（都市農村交流によって綾部で生まれる物語数）
ビデオおじさん、名刺のプレゼント、ポスターのプレゼント・・・

アポのいないまち　アポ社会を超えて、コモンズ空間として綾部、開放性

人生探求都市

普通力

（視察多い理由＝わが町でもできそうと思えるヒントがこの綾部にある）

「地元通信」の配布

- ・旧豊里西小学校区内にスタッフが全戸配布した時代も
地元学（ないものねだりから、あるもの探しへ）　吉本哲郎著『地元学をはじめよう』（岩波ジュニア新書）
スタッフが村をあることで気づくことも多い　近隣の家でも庭先までは用がないと入れない
自治会回覧の限界

綾部里山交流大学

- ・2007年開校（2泊3日を年3回）、2008年マスターコース設置（3回）
- ・交流デザイン学科　世界初の学科？
出会いの創造　新しい組み合わせ・出会いが世界を変える1つとなる
- ・オリジナルの6教科（感性学、地域資源学、価値創出学、交流デザイン学、情報発信学、綾部型学）
- ・講師の組み合わせ
- ・テーマ設定（「大好きなまち・むらで社会的な仕事を創る」「あるもので、ないものを創る！」）
- ・綾部という場所×大学コンセプト×テーマ設定×講師選定＝！

都市農村交流は情報交流

- ・発信力の差が明暗をわける時代　メッセージ・哲学の大事さ

(2) 半農半X研究所と情報発信

人はなぜ生まれてきたのか、どこへ行こうとしているのか(根源的な問い)

- ・我々は何をこの世に遺して逝かうか、金か、事業か、思想か。
- 内村鑑三(1894年・33歳のことば)「後世への最大遺物」(岩波文庫)に28歳で出会う。
33歳で新しい人生を始めようと決める。33歳10か月で綾部市へUターン。

21世紀の2大問題～環境問題と天職問題

- ・環境問題(持続不可能な暮らし方・ライフスタイルという問題) = 1989年入社の株式会社フェリシモ
- ・天職問題(生きる意味、生きがい、自分探し、天職、使命、ミッション・・・) = ユニークな同僚、先輩、経営者

2つの難問の解決(ライフスタイルの問題・環境問題 「半農半X」 ころころ・生き方の問題)

人生を変えた4つのキーワード:「時間軸」「持続可能性」「贈り物」「生き方」

- ・「7世代」(ネイティブアメリカン・イロコイ族) 7世代 = 210年先見通す
- ・「将来世代(future generations)」(1992年地球サミット) sustainable development
- ・「後世への最大遺物」(内村鑑三・33歳・1894年講演録) お金か、思想か、事業か、人生か
箱根でおこなわれた夏季学校に綾部(志賀郷)の人が参加していた記録あり
- ・「半農半著」(作家・翻訳家 星川淳さん) 半農半漁 半農半著 半農半X ?

1995年(30歳)から「半農半X(=天職)」というコンセプトを提唱(発見=自分探しの終了)

半農半X(エックス)とは

天の意に沿って小さな農ある暮らしをベースに、天賦の才(個性、長所など)を世に活かす生き方、暮らし方

永続可能な農ある小さな暮らし(農的生活、天の意に沿う生き方、自発的簡素、シンプルライフ、自給自足、地球にローインパクトな暮らし、野草や自然を暮らしに取り込むていねいな暮らしなど)をベースに、自らの「X」(エックス=天が自らに与えた役割、使命・ミッション、ライフワーク、生きがい、天職、天の仕事、天の才、未知なるもの...)を 実践し、発信し、全うしていくこと。

約10年実践したいま、思うのは、この道でいだろうということ。 ぶれずにいける(コンセプト力、小舟力)

21世紀の方程式

分子・・・天職、ミッション(風・翼 創造性)

分母・・・小さな農ある持続可能な暮らし(土・根っこ 持続可能性)

21世紀の最先端な生き方

半農半社会起業家、半農半コミュニティビジネス、半農半スロービジネス、半農半NPO

Xとは多様性 1万種のX 半農半寺子屋、半農半カフェ、半農半農家民泊、半農半歌手・・・

半農半X研究所のミッション

半農半X研究所は2000年4月設立 里山ねっと・あやべも2000年5月から始動

- ・半農半Xのメディア登場は1998年、『青年帰農』(農文協・2002年7月)
- ・『半農半Xという生き方』(ソニー・マガジズ、03年7月) 『半農半Xという生き方 実践編』(06年1月)
昨年10月、台湾で半農半X1が中国語訳される(『半農半Xの生活』) 台湾から旅人が

- ・『半農半Xという生き方』の読者(紀伊国屋書店データ 20~40代=赤字世代)
- ・4つのもったいない(資源の浪費とエックス・地域資源・コラボレーションの未活用)
- ・和植国家構想 和食×和農(自然農、自給農)×和職(天職) 植福(幸田露伴)

*半農半X研究所の主な活動

- ・半農半Xコンセプトの研究

(半農半Xが社会にもたらすプラスインパクトについて、小さな農ある生活と天職の触発的關係について、エッ

クスカの育成など)と情報発信(書籍、執筆、ブログ等)

- ・村の高齢者の知恵をインタビューする「村のひかりカフェ」
地域(三里四方)に生まれた先人へのインタビュー(知恵の継承)
一人の老人の死は図書館1軒の焼失と同じ(オスマン・サンコンさん)
昭和一桁以前の知恵が残り数年で消える(竹田純一さん)
- ・お茶碗千杯分(約1年分)の米を育てる「1000本プロジェクト」
- ・エックス発見を応援する「半農半Xデザインスクール」(4~11月開催)2007年より
- ・東京でおこなう「半農半Xカレッジ東京」(銀座で年2~4回)2008年より
- ・「半農半Xデザインブック(1)翼と根っこ」作成(半農半Xパブリッシング)

めざすは「生命多様性&使命多様性」あふれる世界。個人的なビジョンは「半農半社会起業家」
ライフワークは「個人~市町村までのXを応援すること」と「Xを応援するためのコンセプトメイク」

- ・グリーンツーリズムから天職観光(天職を観るツーリズム)の時代へ
グリーン・エコツーリズムではなく新しいジャンル創造
- ・まちのエックス(綾部の市街地と農村の個性をもった店やスペースのコラボ、発信事業)
- ・コンセプトメイク(エックスを言語化する、独自性あるコンセプトに表現)

半農半Xブログについて

- ・開設は2003年7月15日(『半農半Xという生き方』が出版される数日前から)
- ・09年1月初め開設2000日経過、同年4月記事数2000達成予定
- ・更新率94%
- ・コンセプト=半農半X研究所の日常を伝え、半農半Xコンセプトの伝えること、気づきのシェア。

特徴:

- ・訪問くださったみなさまへの今日のお土産(エックス・ミッション系)のことば・・・
- ・今日のインスピレーションワード(キーワード、コンセプト、キャッチフレーズ...)・・・
- ・否定の言葉なし、お金の話なし

(3) 私が考える情報発信のキーワード

大事なのは「感性」、キーワードは「センス・オブ・ワンダー」

・生まれつき備わっている子どものセンス・オブ・ワンダー (sense of wonder...自然の神秘さや不思議さに目を見張る感性)を いつも新鮮に保ち続けるためには私たちが住んでいる世界の喜び、 感激、神秘などを子どもと一緒に再発見し感動を分かち合ってくれる大人が 少なくともひとりそばにいる必要があります。
(レイチェル・カーソンのことば『センス・オブ・ワンダー』より) 山の神さま(地元の慣わし)

21世紀の「2つのセンス」

- ・センス・オブ・ワンダー(自然の神秘さや不思議さに目を見張る感性)
- ・社会起業、コミュニティビジネスのセンス(地域の問題を仕事にしていけるセンス)

4つの「もったいない」

- ・資源浪費(ノーベル平和賞W. マータイさん)
- ・天の才(大好きなこと、得意なこと、役割、使命など)の未活用
- ・地域資源の未活用
- ・多様な人財の未コラボレーション、未交流

あるものでないものをつくる 綾部里山交流大学2008秋講座のテーマ

- ・ないものねだりから、あるもの探しへ(地元学)
- ・世界を変える魔法は「組み合わせ」の中にこそある。(脳科学者・茂木健一郎さんのことば)
- ・アイデア=既存のもの組み合わせ
アイデア発想法 情報と情報が「交配」する仕組みをつくる

- ・多様な交流（人と人、人と地域資源、自分自身など）をデザインし、何かを「創発」できる仕組みが大事
- ・市民の感受性、コーディネート力・企画力アップ、シェアマインド（与えるところ、オープンマインド）が鍵

地域の個性を言語化する、可視化する（視覚言語化）

- ・人生探求都市 綾部に提案したいビジョン めざしてほしい都市像（まちのビジョン）
- 平和都市×里山（自然・文化的景観）×自己探求
- 平和都市宣言、世界連邦、大本教、合気道発祥、グンゼ（キリスト教精神）など

顧客は誰かという視点 誰に来てもらうか、人を選ぶ時代

- ・とあるテレビの事例 我が顧客はもう茶の間にいない？
- ・発するメッセージによって、来る人が変わる 例 2000年開催の京都府7市町のツーリズム企画
- ・田舎が人を選ぶ時代も始まっている 熊本の事例 岩手・遠野
- ・工場誘致の時代から天才誘致の時代へ（2000年発足の総会の際の基調講演）

重要な情報発信

- ・情報発信のない地域は滅びる、知られていないのと同じ（情報発信不要の次なる次元はある）
- ・情報発信する人は2割 受信のみの人8割（大情報発信時代）
- ・大公開時代 基本は死蔵から公開、シェアへ
- ・情報発信によって、解決できることがいっぱいある
- 綾部プロガー100人

大事なのは哲学、ビジョン、コンセプト

- ・これによって差がつく時代の到来
- ・感性格差の時代、首長の感性格差の時代

方向性としての「価値創造性（た）」と「持続可能性（ね）」

オリジナルメッセージの創造

造語力と新概念提唱力

セレンディピティ（思わぬところから幸運を見つける力）

「在り合う」（存在と出会い）

仮説をもつこと

1万時間の投入（継続力） 1日8時間、365日で3年半

拾い集め考える コレクションの大事さ 例 ビーチコーミング 1万点集めよ（民俗学者・宮本常一）

まとめ&まとめ 散逸から収斂へ

月100発信（目標） メディア、ブログ、メールニュース等

放てば満てり

明日、逝ってもいい生き方を

変化はコントロールできない。できることはその先頭に立つことだけである。(P・F・ドラッカー)

アーティストとは自分でやろうとするのではなく向こうからやってくるものを受け取り、それを表現するだけ(シャーリー・マクレーン)

「メッセージ」は最強の武器です。メッセージという武器を持たないで戦おうとしても、これは戦いにならない。ところが、極めて多くの企業が、この最強にして不可欠な武器をまったく持たないで、市場にのぞみます。(小阪裕司著『失われた「売り上げ」を探せ!』フォレスト出版)

どんなに自分の中にいろいろな考えがあっても、自分の考えを相手の聞きたいかたちで出力することができなかつたら、その考えは無用の長物です。その人の社会におけるかたちや大きさというのは、「持っているもの(能力)」×「相手への伝達率」で決まってきます。能力は人によって大きな差はないと思います。差があるのは伝達率(マネックス・ビーンズ・ホールディングス代表取締役社長CEO・松本大)

海に吹く季節の風に名前をつける

「発見とは、誰もが見ていることがらに、新しい意義づけをすること」だそうだ。本によると、紀元前1世紀の半ばに、「ヒッパロスの風」と名づけられた風が存在したという。この風はインド洋に吹く貿易風で、これを発見したアレクサンドロスの水先案内人ヒッパロスにちなんで名付けられた。この貿易風に名前がつけられた後には、その風の価値は飛躍的に変わった。ヒッパロスが発見する以前から吹いていた風であるが、この名前がつけられてからは、多くの航海者が明確な意図を持ってインド洋を船のハイウェイとして活用できることになったらしい。風の規則性を見抜き、それを活用する意義づけを行ったところは、まさに発見である。そして、活用性を高めるために有効であったのは、ネーミングに負うところが大きい。事象や現象に名前をつけるときには、あまり慎重すぎて遅れるより早い時期でのネーミングが望ましい。名前がない時期には存在していることすら認識されにくい。(澤泉重一著『偶然からモノを見つけだす能力~セレンディピティの活かし方~』角川ワンテーマ新書)

やっていることは日英そんなに差はないと感じた。実体はそうなのである。違いは、日本は、まだイギリスへ学びに行き、イギリスは日本に教えに来る点である。イギリスの優れているところは、新しく始まった先端現象を、世界の誰よりも早くコンセプトにまとめて世界に売っているところだ。日本もこうした知的な活動に学び、日本流をソフトウェアにまとめて、日本のやり方を世界に売る発想が必要である。(社団法人ソフト化経済センター町田洋次)

南極のオゾン・ホールの発見は、英国隊によって名付けられて世界に注目されたがオゾン分布の異変データを国際学会で発表したのは、日本隊の方が先行していたのである。『偶然からモノを見つけだす能力~セレンディピティの活かし方』(澤泉重一著・角川oneテーマ21・2002より)

梅棹忠夫さんは新しい時代の動向を「情報」という鍵概念でとらえ、1963年に情報産業論を発表されました。京都新聞で「情報文明を探る」という鼎談企画があり、そこで梅棹さんが興味深いことをおっしゃっていました。それは「情報」という言葉の発見が重要ですということばです。それ以前に「情報」と言われていたのはもっぱら軍事機密だったそうで、梅棹さんはまさに「情報」を発見されたのでした。情報という観点を得て、社会を見ると「そこには広大な視野がひらけた」といわれています。アルビン・トフラーが『第三の波』で「情報産業」という言葉を広げたのは20年後の80年。ダニエル・ベルも「ポスト・インダストリアル・ソサエティ(脱工業化社会)」というだけで、それがどんな社会なのか具体的なイメージも描かれていなくてあらためて梅棹さんってすごいなあと思います。梅棹忠夫さんには『情報の文明学』という本があります。「情報」という言葉の発見が重要。なるほどです。

特徴と個性を競う時代は、何かに徹しきらねばならない。余計なものは、切って捨てるだけの勇気がいる。総合に走るということは、特徴を失うことだとも言える(コンセプター・谷口正和)

バスケットコーチのビルは、「ぼくの壁には、『プロモーションしないと、恐ろしいことが起こる』という標語が張ってあるんだよ」と語ったという。「どんなことが起こるんだい?」とケネディが質問すると、ビルは笑って

答えたそうだ。「何も起こらないってことさ」(ダン・S・ケネディ『大金持ちをランチに誘え!』東洋経済新報社)

与える文化 獲得する文化・・・残念ながらわれわれの文化では与えることより獲得することのほうに重きがおかれています(『あなたが与えたものが、あなたが受けとるもの』ジョン・ロジャー)

あなたが与える時、あなたは受けとります。それが宇宙の法則です。
(アイリーン・キャディのことは『フィンドホーン 愛の言葉』日本教文社・1995年)

人間は手に入れるものによって生計を立て、与えるものによって人生をつくる。(ウィンストン・チャーチルのことは)

人生に意味を与える道は、人を愛すること、自分の周囲の社会のために尽くすこと、自分に目的と意味を与えてくれるものを創りだすこと・・・人生でいちばん大事なことは、愛をどうやって外に出すか、どうやって中に受け入れるか、その方法を学ぶことだよ(ミッチ・アルボム著『モリー先生との火曜日』NHK出版)

(プロデューサーの仕事とは)新しい空気や考え方などを「そこはかたない価値観」に落とし込んで、世の中に提案、定着させていくことプロデューサー歴25年の残間里江子さんのことは)

みずから機会をつくり出し、その機会によってみずからを変えていく。(独立・起業志向の企業文化をもち、個性的な人財を輩出するリクルート社の社は)

「ビジネス書を書く3つのツボ」1.わかりやすく書く。2.焦点を絞る。3.独自の意見を際立たせる
(廣川州伸著『週末作家入門~まず「仕事」を書いてみよう』講談社現代新書)

死後に仕事が残る人と残らない人。みんなが好きなものが好きな(時流に乗った)人よりも、自分の好きなものでええ、と通した人が残るみたい。(作家・田辺聖子)

最も重要なことから始めよ(ピーター・F・ドラッカー)

小さいことを重ねることが、とんでもないところに行くただひとつの道。(イチロー)

自分のやりたいことをためらわずにすることが、成功者に必要な感性なのだ。(『社会起業家に学べ!』著者・今一生) 綾部里山交流大学の2月講座(2009年2月20~22日)で講演いただきます。

すべての創作の「素材」は自分が歩んできた人生にしかありません。(廣川州伸著『週末作家入門』講談社現代新書)

才能というのは、研いでいないナイフのようなものだ。毎日、ただ毎日書き続ければ、そのナイフを研ぐことができる。人によってナイフの大きさは違う。しかし研いでみないことには、そのナイフがどんな形なのかかわからない。小さくてよく切れる果物ナイフなのか。巨大な岩もまっぴたつに切り裂く大ぶりの刀なのか。才能のある・ないというのはこのナイフのサイズのことだ。大きな刀なら歴史的な大作が書けるだろう。でも小さなナイフでも、本を買ってくれる人を一晩夢中にさせる程度の作品を書くには充分だ。だからナイフのサイズが問題じゃない。それが本当にナイフか、つまり「研がれているか」どうかの問題なのだ。だから大事なことは、ナイフを研ぐこと。毎日書くことである。(「才能」について/作家スティーブン・キング)

学ぶ心さえあれば、万物すべてこれわが師である。語らぬ石、流れる雲、つまりはこの広い宇宙、この人間の歴史、どんなに小さなことにでも、どんなに古いことにでも、宇宙の摂理、自然の理法がひそかに脈づいているのである。そしてまた、人間の尊い知恵と体験がにじんでいるのである。これらのすべてに学びたい。(松下幸之助)

言葉なんですよ、言葉。言葉さえ発見できれば、「イメージ生産の技術」宝島社)

言葉はもともと魔法だった。『解決志向の言語学』(法政大学出版局、S・ド・シェイザー著)

まどみちお 「どうしていつも」 簡単なことばの組み合わせですごいこと、世界初の表現を